

「神の恵みはわたしたちひとりひとりに到来している」

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

(聖書協会協同訳 ルカ1:28)

「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みを頂いた。」

(聖書協会協同訳 ルカ1:30)

教会暦はアドヴェントに入りました。

天使ガブリエルの予言によって私たちのために主イエスがお生まれになる、そして恵みが到来することが告げられました。

この恵みという言葉を私たちはよく口にしますが、「神の恵み」「恵みがやってくる」とはどういうことなのでしょう。

私たちの世界には戦争、暴力、差別、経済困難による失業者の増加、犯罪の低年齢化などつらい、悲しい事件・出来事が毎日、新聞やニュースなどで報道されています。

しかし、神の恵みはそのような中にやってくるのです。キリスト教信仰は、人間が打ちのめされるような経験の中にも神の到来を信じています。

「恵み」とはなんなのでしょう。恵みとは嫌なことはひとつもなくなるということではありません。試練がなくなり、悩みもなくなり、苦しみもなくなることはありません。

そうではなくて、それらのどんな状況においても感謝できる。それが恵みの経験ではないのでしょうか。

マリアの人生がそれを物語っています。マリアが恵みを受けたことは、彼女の人生の試練がなくなったことではありません。そうではなく

てどんな試練の中でも彼女にとって感謝があったのではないかと思います。

フィリピの信徒への手紙1：29に「キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられている」とあります。

それは、苦しむことも「恵み」であり得るわけです。「お言葉通り、この身になりますように」(ルカ1:38)

この言葉は、恵みによってどんなことでも感謝するマリアの覚悟ではなかったのでしょうか。「神が共にいてくださる」、また「主イエスがおられる」、そのことがどんな試練の意味も変える恵みだったのだと思います。

「苦しみ」は誰にとっても避けたいものです。しかし、それらを通して恵みが働いている、主が共にいてくださることがわかってくる、そういうことが信仰生活にはあります。わたしたちひとりひとりに神の恵みは到来しているのです。(司祭 ステパノ 越山哲也)

